

BOOK Review

ナラティブホームの物語 終末期医療をささえる地域包括ケアのしかけ

評者 山城清二 富山大学附属病院総合診療部教授



私は患者さんが亡くなるときに、医師として治療やケアが十分にできたという充実感はほとんど得られなかった。その重苦しい関係が終わってやっと肩の荷が下りたと感じ、なぜかホッとしている自分がいた。そんな約8年前、著者の前作『家庭のような病院を』に出会ったことが、医師としての心構えや死生観について考え直す契機となった。そして、“高齢者医療は、人が、人として、人間の最期の生を援助する「高度専門医療」である”という著者の言葉に深く感銘を受けたことを、今でも鮮明に覚えている。当時、EBM（根拠に基づく医療）を教育に取り入れ、さらにNBM（ナラティブ・ベイスト・メディスン）を理解しようとしていたころであった。しかし、対話を重視した臨床応用というNBMはなぜが腑に落ちなかった。そのような中、著者がいう「患者を関係性の中で捉える」考え方が、高齢者医療や終末期医療のもやもやした臨床の現場に実践可能な概念として紹介され、やっと腑に落ちた。

今回、そんな佐藤伸彦医師による待望の続編が出版された。第I部は、絶版となった前著を復刻・再構成したもので、ナラティブホーム「ものがたり診療所」構想が書かれている。ここでは「特別な感動的な話」ではなく、ごくありふれた高齢者の物語に目を向けられる。ナラティブアルバム誕生過程は特に興味深く、感動的である。患者さんの生活を支えるにはそれまでの「生活」を知らねばならない。そこに迫るのは医師よりも看護師や介護士の

ほうが得意であり、アルバム作成は彼女たちスタッフの強力なスキルとなる。著者はそんな行動を誘発させる、やさしさの「しかけ名人」のようだ。第II部では、実際のナラティブホーム開設時の苦労や開設後の診療風景が紹介され、この5年間の取り組みが手に取るように理解できる。これから、このような理念をもった医療に取り組もうと考えている人々に大いに参考になることばかりである。

最も心を揺さぶられたのは、実際にこのホームを利用した人々の紹介である。医師であり神経難病に患った患者さんは、最後に「さ・と・う・た・の・む」と言った。認知症と痛を患ったじいちゃん。口から食べるために胃ろうを使ったじいちゃん。娘のコンサートを見に出かけた脳腫瘍のばあちゃん。通常、医学書では患者さんの顔写真はあまり出ないものであるが、本書では診療の様子や周囲の風景とともに、その快諾のもと嬉しそうな患者さん自身が登場される。皆さんの満足そうな姿が、われわれ医療者へ「終末期医療をよろしく頼む」と訴えているようにも感じる。また、本書にしかけられた、時空を超えて宿ったある父子の物語も、読者自身で確認していただきたい。

Medicine for Being in Relation——本書のメッセージは、世界一の超高齢社会を迎えたわが国から発信できる最先端の概念かもしれない。ぜひ多くの医療関係者に読んでいただきたい。

佐藤 伸彦 著

A5判/272頁/2015年/定価(本体1,800円+税)/ISBN978-4-260-02098-5/医学書院 刊